
ドラマみたい？

河村 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラマみたい？

【Nコード】

N6689Q

【作者名】

河村 和

【あらすじ】

短いのであらすじというあらすじはございません。

夕方、誰もがその日を半ば終え、仕事から解放され、人生を始める時間。

慌ただしく、徐々に暗くなる時間。

ファミレスの一番奥から、全てを眺めるように座っている。

その日、僕は本を読んでいた。自分の部屋にいては静かに本を読むことすらままならないからだ。四人家族の長男、それが僕だ。

今年六歳になる妹と、四十からは数えていないと豪語する夫婦。僕は周囲と大差ない、ある程度は恵まれた人生を送っていた。

余り裕福とはいえない家庭ではあるが、僕はなんとか公立の大学に忍び込むことができたし、それなりに悪くない生活を送っている。これで母の手料理が大雑把でなければ、最高だったかもしれない。店内はざわついている。いつもそうだ。料理よりはお喋りのほうがメインディッシュではないかと思えるほどに、この店はざわついているのだ。僕のように静かな、といっても僕は僕で店側からすれば煩い客なのだろうが、そんな人間は少ない。誰も彼もが仕切りを跳び越える声で喋っている。

そんな飛び越えてくる会話を聞くことが、僕にとっての楽しみでもあるわけだけど。

「ねえ、知ってる？ あそこの路地裏、死体がでたんだってよ！」

「ホント？ あんたその手の話ばっかもってるよねえ」

甲高い女性の声があることを言っていた。別に人が死ぬのは珍しくもない。殺されるなんてこともニュースじゃいつもやっている。でもそれが身近にあるのは、また違った感情を抱かせるものだ。僕であれば、妹の身を案じてみたり、父であれば、母のことを案じてみたり、という具合にだ。そんな感情が果たして人間に備わっているのか、時々僕は不安になるのだけれど。

僕はいまだに人の死体を見たことがない。猫や犬や、形もわから

ない獣の死体くらいなら、道路で眺めたことはある。蛆が湧いたり、アスファルトの隙間に埋めるようにすり込まれていたりする、そんな死体。肉片と言っても間違いいではないだろう。それは腐敗し、とても冷蔵庫で見る肉と同じようなものだとは思えないが、少なくとも、僕は彼らに同情したりすることはしないのだ。

僕の読んでいる本、ミステリ小説なのだけれど、いまだにミス터리がなんであるかを理解はできていない。数ある本は、やはり、そのようになるのでしょうか、としか言いようがないのだ。それは現実ではないし、現実にあつたとしても、そのようになるかは甚だ怪しい物事だと僕は思う。

僕は二十六ページ冒頭。

『路地裏の静けさはまるで、海の底のように感じられた。重苦しい空気が全身を圧迫し、呼吸することすらままならない。薄暗さは冷たく、私の背筋は震えているようだった。私が思うに、転がっている手首は、恐らくその向こう側に誘っているのだろう。それがペンキのついたマネキンの手首だと思えば、私は幸せな気持ちで家に戻り、シャワーを浴びて、ウイスキーのロックをちびちびやりつつ眠りにつけるはずなのだ。その頃には、この手首はモナリザの手首のように見えてくるかもしれない。奥の方は暗くてよく見えないが、正直なところ、私は明るくても見たくはないと思っている。しかし、この手首にはなんとも言えない、触れてみたいような妖しさを感じるのも、また事実なのだ。』

「ああ、そう言えば、彼女、会社休んだみたいだけど、連絡あった？」

低い声。スーツ姿の男、長髪は整ってはいるが、とても営業マンには見えない。事務職だろうか、それとも偉い人なのだろうか、僕にはよくわからない。

「いえ、連絡はありませんでしたね。こちらからも電話してみたのですが」

女性の声はいつかどこかで聞いたような、そんな響きだった。顔

はここから見ることはできない。どこか事務的で、そんなことはどうでもいいと思っっているような印象も感じられた。それは、僕が勝手に受けた印象であって、実のところ胸が裂けるほどに心配しているのかもしれない。

しかし、僕はそんなことは知らないし、誰かの心が読めるわけでもない。雑音のような会話に、勝手な感想を述べるのが精一杯なのだ。なにせ僕は本を読んでいるのだから。

頼んでいたコーヒーがきたので、僕はスプーンとシロップを避けて、口へ運ぶ。なんだってシロップやミルクを付けたがるのか、僕には分からない。このシロップが巡り巡って誰かのテーブルに辿り着くこともあるのだろうか、あるいは、またここに座った僕の前に、初めまして、というすました感じで現れるのだろうか、何度現れようとも、僕はそれを皿にのせたまま、返してしまっけどね。

「あいつ写メとったんだって、マジでグロいの」

コーヒーは苦い。いつもそうだ。熱くて苦くて、舌の付け根が恋してるような、寂しくなる苦さだ。口の中から鼻へ、香ばしい香りにも、惹かれるものがある。背筋からじんわりと滲む温かさも、魅力だろう。

外の景色を眺める。車が通りすぎていく。赤、緑、黒、青、白、実に沢山の車だ。さして変わらないそれらに、一人として同じ人間が乗っていないというのも不思議なことだ。同じものであって違うもの、急いでいる人、そうでない人。歩道を歩く人は疎らで、似たような服を纏っている。確かに、スーツと学生服は違う、しかし、洋服を着ているというカテゴリからすれば、同じものであると思う。仮に目の前の銀色のバンに、二十歳かそこいらのスーツを着た女性が連れ去られたとしても、違和感を感じるのは難しい気がする。

それはどこにでもありそうな光景で、実際に目の前で起こっている。犯人は顔を隠していて、女性はどこにでもいるスーツ姿だ。

「おい、今の見たかよ。女が攫われてくの」

「見た見た、初めて見たよ、ドラマが真似してんのかドラマを真似

してんのかわかんねえよな、あれじゃあよ」

どこにでもある若者の会話、偶然の一致だ。きっとドラマの話をしているのだ。お涙頂戴で、誰の得にもなりはしない物語。主婦達の貴重な時間を奪い去り、忙しいという言い訳で脳みそを埋め尽くす為の物語。

ドラマを見る為であったり、ドラマを見た為であったり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689q/>

ドラマみたい？

2011年2月5日16時26分発行